

<今日の説教のポイント コリントの信徒への手紙Ⅱ9章1-15節>
神はキリストを与えて下さった！ その恵みに感謝して歩める贅沢。

1 (1-7) これまでの募金の勧めのまとめ。

9章1～7節は、これまでパウロが語って来た貧しいエルサレム教会への募金の勧めのまとめと言えます。「不承不承(痛みから)ではなく、強制されて(強制から)でもなく」(7)は、パウロが一番強調している点です。しかし、私たちの取るべき姿を学ぶだけの箇所ではありません。なぜパウロが心からこう言えるのか、その理由を知ることが大切です。

2 (8-9) パウロは神様が下さったキリストのことを考えている。

パウロは、「神は、あなたがたがいつもすべての点ですべてのものに十分に、あらゆる善い業に満ちあふれるように、あらゆる恵みをあなたがたに満ちあふれさせることができになります」(8)と言い切ります。なぜそんなことが言えるのでしょうか？ それは神様が私たちのために大事な御子を惜しみなく与えて下さったことを考えているからです。続く9節、「彼は惜しみなく分け与え、貧しい人に施した。彼の慈しみは永遠に続く」(詩編112:9の引用)は、十字架の死に至るまでご自身を低くなられた独り子を私たちのために与えて下さった神様のことをパウロが思っていることを示しています(フィリピ2:1-10)。先の8節の言葉はこの神様の特別な行為を思う中で語れる言葉であり、持てる思いの言い表しなのです。

3 (10-15) 金銭的に貧しくても富んでいる。その富を持つ信仰者。

「あなたがたはすべてのことに富む者とされて惜しまず施すようになり、その施しは、わたしたちを通じて神に対する感謝の念を引き出します」(10)。この辺りを読むと、パウロの頭はもう金銭的に富んでいるかどうかではない富を考えていることが分かります。神様からキリストを与えられたことを知る豊かさです。この神様が私の真の親なのだということを知って、人生を新たな思いで生き出せる大きな恵みであり豊かさです。この特別な神様の恵みが「福音」であり、その喜びから湧き出て来る信仰者の姿の一つが「惜しまず施しを分けてくれること」です(13節)。パウロにとって宣教とは、信仰者のこの福音の宣べ伝えとそこで生まれて来る信仰者の行為の二つ、どちらをも含むものなのです。「この奉仕の働き」(12)の「奉仕:レイトゥルギア」はここでは募金活動を指しますが、礼拝に仕える奉仕にも用いられています(ルカ1:23。リタージ:典礼)。サービスは礼拝とも訳せます。人々に仕えることと礼拝の関係を示しています。